出生季節が18 ヶ月児の行動発達に与える影響：HBC Study

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2016-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅野, 良輔, 土屋, 賢治, 奥村, 明美, 釘嵜, ゆめの, 鈴木, 由紀子, 中原, 竜治, 中安, 智香子, 原田, 妙子, 山下, 真菜, 伊東, 宏晃, 武井, 教使 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2953

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2015 年 第 4 巻 第 1 号　79 頁

出生季節が 18 ヶ月児の行動発達に与える影響：HBC Study

浅野良輔[1]、土屋賢治[1]、奥村明美[1]、釘嵜ゆめの[1]、鈴木由紀子[1]、中原竜治[1]、
中安智香子[1]、原田妙子[1]、山下真菜[1]、伊東宏晃[2]、武井教使[1]

1. 浜松医科大学子どものこころの発達研究センター、2. 浜松医科大学産婦人科学講座

【背景・目的】

乳幼児期は、物事に対する注意の持続や移行ができたり、親のしつけに従えたりするエフォートフル・コントロールを形成する一方で、他者に対してたたいたりかみついたりする攻撃性も発露する時期である。発達早期における行動発達の問題は、その後の発達段階での反社会的行動や犯罪行為につながる可能性があるため (Shonkoff et al., 2009)、乳幼児のエフォートフル・コントロールや攻撃性の予測因を明らかにすることは重要である。

これまでの研究では、生まれた季節が個人の行動や気質に影響するという報告はなされているものの (Chotai et al., 2001; Rihmer et al., 2011)、一貫した知見は得られていない。そこで本研究では、代表性の高い出生コホートを利用して、出生季節が生後 18 ヶ月におけるエフォートフル・コントロールと攻撃性に与える影響を検討した。

【対象・方法】

参加者　静岡県浜松市における浜松母と子の出生コホート (Hamamatsu Birth Cohort: HBC Study; Tsuchiya et al., 2010) に参加している母親 934 名 (平均 31.1±5.11 歳) の児 (月齢 18 ヶ月; 女児 464 名、男児 470 名) を解析対象とした。

測定内容　(a) 出生季節：児が生まれた季節を“冬”(12～2 月)、“春”(3～5 月)、“夏”(6～8 月)、“秋”(9～11 月) にカテゴライズした。(b) 行動発達：児の 18 ヶ月齢に、乳幼児の行動チェックリスト (Putnam et al., 2006) を用いて、エフォートフル・コントロール (5 項目 5 件法) について母親に尋ねた。また、カーディフ式乳幼児攻撃性尺度 (Hay et al., 2010) を用いて、攻撃性 (4 項目 3 件法) について母親に尋ねた。(c) 統制変数：分析の際に、母親の年齢、父親の年齢、母親の教育歴、父親の教育歴、母親の出産意思、母親のうつ病・不安障害既往歴、パートナーからの情緒的サポート、児の性別を投入した。

【結果】

エフォートフル・コントロールを結果変数とし、誕生季節 (参照カテゴリー：冬) を説明変数としたロバスト重回帰分析を行った。その結果、7 つの統制変数を投入してもなお、春や夏の誕生はエフォートフル・コントロールに正の影響を与えていた (B = 0.480, 95% CI [0.152, 0.808], p = .004; B = 0.462, 95% CI [0.129, 0.794], p = .007)。

つぎに、攻撃性を結果変数とし、誕生季節を説明変数としたトービット回帰分析を行った。その結果、統制変数を投入してもなお、春の誕生は攻撃性に負の影響を与えていた (B = -0.398, 95% CI [-0.719, -0.076], p = .015)。

【結論】

本研究の結果から、温暖な季節に生まれることは、そうでない季節の出生よりも幼児期早期の行動や情緒の発達を促進することが示唆された。